

目次

まえがき	
本書の特長と使い方	4

第 部

カポエイラのなかの音楽	12
楽器と歌の重要性	
いい音楽とは	
歌の種類	17
ラダイーニャ	
クワドラ	
カント・ジ・エントラーダ	
コヒード1	
コヒード2	
楽器とトーキ	26
楽器の種類	
トーキとジョーゴ	
ホーダの進行手順	33

第 部

Ladainha (ラダイーニャ)	39
Corrido 1 (コヒード1)	89
Corrido 2 (コヒード2)	155
収録レコード・CD リスト.....	207
参考文献	

あとがき

まえがき

「音楽は国境を超える」と言われる。耳障りのいいメロディー、何かを訴えかけるように歌うアーティストの表情、体全体で楽器を演奏するミュージシャンのエネルギーは、たとえ歌われている内容が外国語で分からなくても、私たちの心を揺さぶるものがある。

ブラジルやカポエイラにかかわり始めて、私もこういったことを体験的に実感することができた。インディオの母親が歌う子守唄は日系人の赤ちゃんを寝かしつけることができるし、私たちが演奏するつたないカポエイラの音楽を聴いて、自然に体を揺らし飛び跳ねる子供たちを見た。人間がやすらいだり、感動したりする根っこには言語を超えたなにか共通の岩盤がある証拠だろう。

しかしひとたび感動の受信者から発信者になろうとすると、とたんに様々な壁が立ちはだかる。やはり「聞いていただく」ための最低限の表現技術が必要になるし、ましてそこに感情を込めるためには音を理解し、歌詞に共感する必要がある。そもそも自分が持っていない感動は、他人に分け与えようがないのだ。とくにテーマが異文化のものである場合、それはなかなか簡単なことではない。

この小冊子の目的は、カポエイラの中の音楽について概説し、とくに代表的な歌を紹介することにある。

実際わたしたち日本人がカポエイラを習い始めて最初に面食らうのが、ポルトガル語の歌だろう。体の動きや楽器の弾き方は、注意深く観察してある程度まねることができるが、外国語の歌だけはいくら聞こえたとおりに歌ってみてもどこか心もとないものだ。

やっかいなのは発音ばかりではない。カポエイラの歌には一般のブラジル人でも分からない単語や言い回しが頻繁に登場する。それはアフリカ起源の言葉であったり、宗教用語のこともあれば、非常に遠まわしな比喩であるためにカポエイラに通じていないと何を言いたいのか分からない場合も少なくない。私がブラジルにいたころ、大学生の友人に聞いても答えられないことを、字も書けない古老が明快に説明してくれて不思議な感動を覚えたことを思い出す。

ブラジルに何年か住んで多少ポルトガル語を覚えた私でも、分からない単語に出くわしたらポ和辞典では解決しない。ポ和辞典に民俗学事典、ブラジルへのEメールや国際電話が必要になるのだ。まして一緒に練習している日本人の仲間にしてみれば、調べたくても調べようがないというのが実情だと思う。

そこで準備不足を百も承知で、ブラジルや日本のホーダで定番になっている曲を整理し、分かる範囲で解説を試みた。実際のところブラジルにおけるカポエイラ研究の中でも音楽分野は最も立ち遅れている分野であり、文献で参考にできるものは非常に限られている。ここでは私がこれまでいろいろなメストリに聞いたこと、ブラジル人の研究者仲間に確認したことなどを積極的に盛り込んだ。

今後の研究で分かること、「自分たちはこういうヴァリエーションで歌っている」と他のグループから教えていただくことなどは、改訂のときに取り込んでいき、少しずつ完成度を高めてゆければと考えている。またホームページ「カポエイラ入門」(www.vadiacao.org)にも専用のページを設けて、発行後に気づいた誤りや情報、寄せられた批判、質問などを掲載していく予定だ。そういう意味ではまったく未熟な試作品ではあるが、本書が文字通り「たたき台」となって、活発な議論が展開されるようになることを期待している。新しいフレーズ、オリジナルのヴァリエーションなどを余白に書き込んで、どんどん使い込んでほしい。

またカポエイラ全般に関する入門書もまともでない現状で、なぜ音楽の解説書や歌集から手をつけるかということについて一言触れておきたい。周知のごとくカポエイラと一口に言っても、アンゴラ、ヘジオナウ、コンテンポラニアと、少なくとも3つの大カテゴリーに分けられる。さらにその中でスタイルや進級制度、哲学などにおいてグループごとに分断されているのがブラジルのカポエイラ界の実情だ。とくにカポエイラが商業的に魅力的になってきた90年代以降、グループの乱立、吸収・合併、脱退が繰り返され、今日に至っている。皮肉なことにここでも音楽だけが「唯一の共通言語」になってしまっているのだ。

本家の混乱は分家にも飛び火する。これは日本に限らず、米国においても欧州においてもカポエイラの基本単位はグループなのだ。もちろん講習会やバチザードなどグループ間の横の交流もあるにはあるが、最終的にはブラジルにある親団体との縦のつながりを超えることは難しい。仮に私がカポエイラの技術に関する解説書などを作ろうものなら、「俺たちはそんな技は使わない」「私たちはそんな名前では呼んでいない」と、批判が噴出するのは目に見えている。いま日本でカポエイラをしている人全員にすぐ役立つのは、歌集以外はないのだ。

「そんなの俺は興味ない。もともと音楽をするためにカポエイラを始めたんじゃないんだから」と切り捨ててしまうのは、ちょっと待って欲しい。私も最初はそう考えていたの

で理解はできるのだが、楽器を担当し、コーラスに参加できるようになったとき、あなたはカポエイラのより奥深い魅力を発見することになるだろう。

それは一言でいえばホーダ(カポエイラを行う円)に充満するエネルギー(axé)である。安定感のある伴奏に合わせてリーダーが歌を導き、それに取り巻きの人々のコーラスが応える。その掛け合いの熱気を外に漏らさないかのごとく人々はホーダを丸く囲む。ちょうど圧力釜の中のように、封じ込められて行き場のなくなったエネルギーはカポエイリスタの体の中に侵入し、その魂を揺さぶる。魂に突き動かされたカポエイリスタのジョーゴは、見る人に鳥肌を立たせ、その感動がホーダに新たなエネルギーを送り込む。ジョーゴを終えた人は楽器を取り、楽器を弾いていた人はホーダに入るだろう。こんなふうにカポエイラのホーダの中ではエネルギーが複合的に循環しているのだ。

この「エネルギー」の正体がどんなものかは、今後いろいろなホーダで注意深く観察してみてほしい。観察する前提としてとても大切なことは、あなた自身がそのエネルギーの受信者であると同時に発信者でもあることを忘れないことである。

それでは小難しい話は置いておき、さっそく声を出してみよう。Vamos cantar camará!

カポエイラ・ヴァジアソン
久保原信司

本書の特長と使い方

この本の特長は、次の3点である。

カポエイラの音楽について日本語で解説している。

検索しやすいようにアルファベット順に配列し、収録CDを示した。

曲の歌いだしをビリンバウの叩く位置に対応させて番号で示している。

現在までのところカポエイラの歌はおろか、カポエイラそのものについても日本語で解説されたものはほとんどない。ときどきテレビや雑誌で紹介される際も、「手を鎖で縛られていた奴隷たちが足技を発達させて身を護るようになった」などというウソがまことしやかに繰り返されている状況だ。そこで私のとぼしい知識ではあるが、これまでに調べたことを日本語で解説することにはそれなりの意義があると考えた。本書によって皆さんのこれまで分らなかったことが一つでも解決すれば幸いである。

アルファベット順の配列についてはごく当たり前のことのように思われるが、こんな基本的なサービスもこれまでの歌集ではほとんど採用されてこなかった。ブラジルで発行されている歌集などでは、収録されている曲数は多いものの、まったく不規則に記載されていたために、ある曲を探そうと思っても「確か右側のページの上のほうに載っていたなあ」という勘を頼りにするほかなかった。似た曲があちこちに点在していたり、同じものが重複していたりして、とにかく「あの曲」を調べたいと思ってもすぐに見つけることが難しかったのだ。

また歌い始めるタイミングがビリンバウのどの位置を叩くときに重なるかを番号で示したことは、この本のオリジナルである。これは私自身が感じた困難から工夫したアイデアなのだが、ホーダの中で歌いだそうとすると、入るタイミングで迷うことがしばしばある。これは私自身の音感のなさや練習不足に加えて、ちまたで耳にする歌われ方に少なからぬ混乱があることにも原因がある。

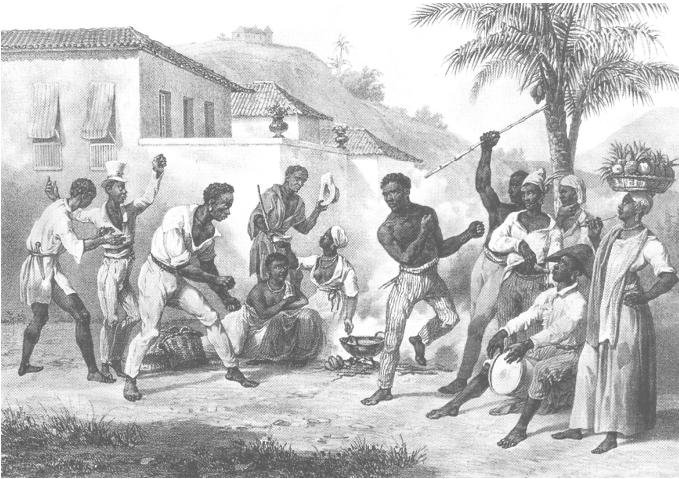
引き合いに出すには恐れ多いが、ほとんどの人におなじみの有名な作品ということでメストリ・カイサーラ (Mestre Caiçara) のレコード (*Academia de Capoeira Angola São Jorge dos Irmãos Unidos*) を取り上げさせていただきたい。この作品はカポエイラ・レコードの中の傑作の一つで、彼の歌唱力は誰もが絶賛するところだが、ただメストリが歌っているタイミングと伴奏のビリンバウとの関係に注目すると、いわゆる「裏」から始まっていて、一般的な感覚からすれば「ズレている」と言わざるを得ない。具体的にどうい

ことを言っているのかは、このあとの「歌いだし番号の規則」のところで説明する。

第 部では、カポエイラの音楽に関する基本的な知識を整理した。歌の土台となる伴奏の種類や使われる楽器、歌の種類、ホーダの進行、説明を進めるうえで最低限必要な範囲でアンゴラ、ヘジオナウ、コンテンポラニアの違いについても触れた。

第 部では、ドミーニオ・プーブリコ (domínio público) と呼ばれる「伝統的」な歌を中心に、新しいものでもカポエイリストなら誰でも知っている定番の曲を収録した。現在ブラジルでは毎月何枚ものカポエイラCDがリリースされていて、そのほとんどがオリジナル曲で占められている。なかにはそのグループのテーマ曲のようなものまであって、こういうものまで取り上げだしたらきりがないのだ。

ちなみに本書は、巻末に紹介したレコードやCDの歌詞カードを右から左にコピーして出来上がったものではない。最近では改善されつつあるが、カポエイラCDの最大の欠陥！は歌詞カードが付いていないことだからである。付いている場合でも誤字などが非常に多く、頭から信用することはできない。そのうえとくに歌い手が古い先生の場合、バイーアの訛りと老人特有の舌足らずな発音がまじりあって、聞き取りにくい部分が結構あるのだ。ブラジル人のカポエイラの先生に尋ねてみても、人によって答えが食い違うことも珍しくない。CD制作者は、リスナーへの最低限の心配りとして歌詞カードだけは添付するべきだと思う。したがって本書でも念入りに調べはしたが、まだ不安な部分はいくつも残っていることをあらかじめお断りしておきたい。



Rugendas の版画 Viagem Pitoresca através do Brasil, 1979, Italiana, Belo Horizonte から転載

Vamos cantar camará
